

白隠研究の現状と課題

芳澤 勝弘*

白隠慧鶴（1685～1768）がいつごろから「日本臨済禅中興の祖」と呼ばれるようになったのかは定かではないが、没後100年にはすでにそのような認識が定着しつつあったと思われる。没後100年はちょうど明治元年に当たる。臨済宗各派では、幕末から「専門道場」の開設が相次いでいたが、明治期に入るとこの新しい修行システムがほぼ出揃っていた。このような修行形態は白隠が企画したものではなかったが、白隠の法系下で次第に出来上がったものである。専門道場は臨済宗の僧侶を育成するだけでなく、白隠下の法燈を継承する師家を輩出する機関ともなっており、かくして白隠の法燈が現在に到っている。そして、明治期になると、妙心寺派では「白隠禅師坐禅和讃」が日課として採用されて誦まれるようになった。生誕200年の明治17年（1884）には、正宗国師号が下賜された。このようにして、白隠は妙心寺派の傑僧・高僧として奉られるに至った。

一方で、明治年間になると、『白隠和尚全集』¹と『白隠広録』²という二種類の白隠の著作集が刊行されている。そして、没後150年を迎えた大正7年11月（1918）、雑誌『禅道』が百号記念として「白隠研究」特集号を刊行した³。

『禅道』は釈宗演を師家として戴き関東（東京）で活動する禅道界の機関誌で、その主筆は鈴木大拙であった。「白隠研究」という言葉は、これが初めてのものではないかと思われるが、タイトルに違わず画期的な内容のものもあった。釈宗演、鈴木大拙をはじめ総勢47名が執筆している。それぞれ原稿は短いもので、中には随想短文のコメントもあり、臨済宗師家は偈頌のみという内容とはいえ、執筆者の数とその多様さには驚かされる。

*花園大学国際禅学研究所顧問

臨濟宗の禅僧特集であるのに曹洞宗大学の関係者の寄稿も多い⁴。現在、このような特集を組んだとしたら、果たして47名もの執筆者があるだろうかと考えさせられる。

鈴木大拙は『禅道』の主筆として巻頭論文を書いているが、その内容は100年後の今日からみても興味深いものがある。その要点を強引にまとめると以下のようなものである。

- ・ 現今の日本における臨濟宗は白隠禅である。白隠派以外の系統は全く絶えた。
- ・ 白隠宗は看話禅である。この公案禅の体系は白隠の自ら始めたものではなく、その系統を延いたものの中に自然に成り上がったのであろう。所謂梯子悟りであるが、これが看話禅の長所であると共に亦其の大なる弱点であり、野狐禅の入る余地がある。
- ・ 同じ禅でも曹洞宗は高祖を理想化した「道元宗」であるが、臨濟宗にはそういう傾向は見えない。「白隠々々」と何だか親しい友達のやうに呼びなしてをる処に、臨濟宗の臨濟宗たる面目がある。
- ・ 日本における将来の臨濟禅は、白隠の精神を出発点として、これに二十世紀の思潮を織り込んで行くべきである。

寄稿の多くはきわめて短いものであるが、中には白隠研究における問題点を抉り出してすばり指摘するものもあり、この意味でも「白隠研究」に背かぬものだったといえよう。京都帝国大学教授で理学博士の近重真澄は「宗格と白隠」と題する小文の中で「白隠は正受老人ではなく宗格に嗣法した。白隠の印可証明はない」といい、堆雲市客（陸川堆雲）⁵も「白隠和尚に関する疑議の一部」の中で「白隠の正受老人からの嗣法」したという定説を問題視し、さらに居士の飯田欽隠⁶も白隠と正受老人との関係に疑問を投げかけている。陸川堆雲はのちに白隠論を一書にまとめることになったが、その中で「近重、飯田両氏は……俗世間の居士であつたから、斯く遠

慮の無いことが云へたのかも知れぬ」と回顧している⁷。しかし、このような宗旨の伝灯に関わる根本問題は、これ以後、数多く登場する白隠論考の中ではほとんど問題視されることはなかったのであり、その先見性は注目に値しよう。

生誕250年を迎えた昭和9～10年には、『白隠和尚全集』八巻が刊行された⁸。明治期に出た二種の著作集に比べると、ほぼ白隠著作を網羅したもので、文字通り「全集」と呼べるものであった。また本集には白隠著作のみならず、法祖である至道無難、正受老人関係の資料、そして会下である東嶺、靈源、遂翁、斯経、円桂等の資料も収録しており、以後の白隠研究を担保するものとなった。

明治以降、白隠について書かれた随想・論文、紹介書・入門書はかなり多くある。とは言うものの、同じ禅僧である良寛や一休にくらべると、その数は格段に少ない。これらの「白隠関係論文」の大部分は、実は論文というよりは、僧侶・学者・作家・評論家・好事家などが、白隠という禅僧を啓蒙的に紹介するために書いた文章であって、その内容は、およそ次の三種に大別される。

- ・高僧としての白隠伝（幼児期の地獄体験、刻苦修行とその克服）
- ・健康法（夜船閑話、遠羅天釜の概説紹介）
- ・白隠禅画についての随想

つまり、どれも似たりよったりの内容のものが繰り返されて来たともいえる。白隠は「中興の祖」として崇められるようになったのであるが、その研究は概して低調であったと言わざるを得ないのであった。その理由は那邊にあったのか。

一つは、臨濟禅の本質に関わる。不立文字の看話禅を標榜する臨濟禅では、坐禅と公案参禅を絶対視し、言語での探求を戒める。したがって、宗門には伝統的に、研究とは参究であって言語の詮索などもってのほかであ

るという風潮があり、これが科学的研究を阻害する要因となっていたことである。

戦後になると禅研究は新たな展開をし、禅宗史も教団を離れて究明されるようになったが、その主流は中国禅宗史であり、ことに唐代禅に関心は集中した⁹。そういう思潮の中で日本禅宗史などは一段と低いもののように扱われ、白隠を研究対象にする者も少なく、依然として「中興の祖師」として称えられる対象であった。

鈴木大拙は若い時から白隠禅に参じていたのに、本格的に白隠を論ずることは少なかった¹⁰。日本の禅研究を牽引し大きな影響を与えて来た鈴木大拙に白隠研究の論考が少ないことは一つの謎でもあるが、これが白隠研究の低調の一因にもなっているだろう。また、幅広い禅研究の論考を発表して来た柳田聖山にも、白隠をテーマとするものはそう多くはないのである¹¹。

そんな中で、着実な成果を積み上げたのはむしろ、在野の研究者であった。その代表が陸川堆雲の『考証白隠禅師詳伝』であった。すでに半世紀以上も前の業績であるが、白隠研究史上の金字塔ともいべきもので、今なお光芒をはなっており、白隠研究の出発点とされるべきものといえよう。

陸川はかねてから疑問視して来た白隠の嗣法問題について、白隠に印可証明のごときものはないが、「正受庵辞去後に数年間各地に宗匠訪ね……其結果は正受老人に及ぶ者は他に無きことを深く自覚した。それ故に正受老人を生涯の師なりと断定渴仰するに到つた。後年になればなる程此の考は益す々々深く、正受の法恩は肝に銘じ、肺肝に刻して忘れ難きものとなつた。……それ故に白隠は正受老人の正嫡と称するに何の不可かあろう」と、実質的に法の継承者であると認めている¹²。

また、陸川は白隠の法嗣についても問題提起をしている。「従来の白隠伝及其法系図を見ると、法嗣の記載は全く出鱈目と云ふ可く、法嗣と門下との区別を明白にせず、云はば羅列的で十把一からげと云つてよい」¹³と指摘しているが、この問題についても何ら論議されることないまま、『禅

学大辞典』（1978年刊行）所載の法系図へと引き継がれている。

明治以降、殊に脚光をあびるようになったのが、白隠の書画である。細川護貞、山本発次郎といった熱心な美術収集家によって、白隠の書画の収集と保存が計られ、武者小路実篤、岡本かの子といった文人もこれに美術的評価を加えた。さらにはクルト・ブラッシュらの参加があり¹⁴、第二次大戦後の世界的文化潮流の中でゼン・ブームと呼ばれるような動きもあって、白隠禅画は世界的な関心を惹起することになり、現在に至っている。白隠の名はむしろその墨蹟・禅画に対する興味の方が先行して、ひろく知られるようになったといってもよい。

そうした中で、竹内尚次の『図録白隠』（1964年、筑摩書房）が刊行された¹⁵。美術史の専家の調査によって388点の墨蹟禅画が収録された、本格的な図録であった。

1977年、仏教書ブームと呼ばれる時流もあって、講談社から「日本の禅語録」全20巻が刊行されることになった。前代未聞の大企画で、しかも全巻を現代語訳にするという画期的なものであった¹⁶。栄西、大応、大灯、夢窓など日本臨済宗の祖師がみな企画に入ったのだから、「宗門出身の学者」で成り立っていた花園大学を中心とする執筆陣はすでに払底状態であった。「日本臨済禅中興の祖」である白隠も加えられることになり、このシリーズ19「白隠」の執筆にあたったのは中国仏教史の鎌田茂雄であった¹⁷。鎌田は「白隠はあまり好きでないという人が多い。その理由はいろいろあるが、白隠の厳しい苛酷な禅の修行にどうしてもついてゆけぬという人もあり、白隠の仮名法語には品位がないという人もある」¹⁸とし、「漢文語録はまったく難解だ。……とても読めるものではない」ととまどいつつ、「あまり教養のない一般庶民に禅を分りやすく、しかも面白く説いた仮名法語」¹⁹の翻訳をしている。同書の冒頭論文「白隠 その全体像と思想的特質」は、戦後、初めて出された白隠論であったといえよう。この中で、かつて明治年間に近重真澄と陸川堆雲が指摘した「白隠は正受老人に嗣法しているのか」という問題をとりあげ、陸川が『考証白隠和尚詳伝』

で再考した結論「白隠は正受老人の正嫡と称するに何の不可かあろう」という考えを追認している²⁰。

1979年、船岡誠は「白隠禅の思想史的意義」を著わし、禅僧の思想的評価ということとは「思想史家の眼には止まりにくかったし、あまり魅力のある対象ではなかったわけである」とし、白隠を中興の祖であるとする評価は「多分に結果論的なところがある」と批判しつつ、従来ややもすると低く見られがちであった仮名法語に焦点をあてて、白隠の「護法論」と「大悟観」について論じ、後者について「白隠にとって大悟とは相対的価値しか持たず、常に悟後の修行（菩薩の威儀）によって検証されねばならないものであった」とするのは、新たに白隠禅の本質を指摘したものであった²¹。

1999年から、芳澤勝弘『白隠禅師仮名法語全集』全13冊が順次刊行され、別冊『総合索引』をつけ、2003年に完結した²²。これは、明治以降に刊行された著作集、全集における翻刻の誤りを訂し、詳細な注釈を加え現代語訳を付したものである。

白隠禅師の仮名法語について、鎌田は「あまり教養のない一般庶民に禅を分かりやすく、しかも面白く説いたもの」といったが、このような考え方は昔からあった。たとえば、『白隠和尚全集』『お婆々どの粉引き歌』の解題には「下根の四衆を度する為めに、飴を含みて醜を忘れたるものか」などという。さらにさかのぼって、江戸時代の松浦静山は「在所の辺なる田婦に与へ、これを謡はしめ……口誦して自から知り、聞く者耳底の善を為さんこと」を企画したものだという²³。お婆々はこの都々逸様歌謡を士農工商のために謡いはじめるが、やがて対象は武士へ、さらに貴族や僧侶へと広がり、後方のおよそ半分は我侬悟りを批判し「菩提心なければ魔道に墮す」ぞと僧を批判し戒めているのである。「下根の四衆に」などと傲慢に言い放つ僧への厳しい批判となるものである。仮名法語は平仮名まじりになってはいるからといって、決して易しいものではない。逆に漢文だけだからといって、語録が難解でありがたいというのでもない。『荆叢毒藥』

のかなりの部分は、訓読にすれば仮名法語とよく似たものになるのである。平仮名まじりの仮名法語を易しとみて、かえって誤解してしまうことはしばしば見られるのである。

一方、芳澤は季刊誌『禅文化』に「白隠禅師仮名法語・余談」を連載し、白隠禅画の画賛に示されている白隠思想を解き明かした。従来、戯画と呼ばれて、好事家が面白がって来たようなジャンルのものは、その賛文を読み解いてゆけば、実は「衆生済度」「四弘誓願」といった白隠の根本思想が込められている布教媒体であることを明かし、白隠の思想は漢文語録、仮名法語、禅画および画賛という、膨大なメディア・ミックスであることを説いた。これら一連の論考は『白隠——禅画の世界』（中公新書、2005年）として刊行され²⁴、英訳や中国語訳も出された²⁵。

2003年、道前慈明によって『訓注槐安國語』が刊行された。道前は京都大学で哲学を修めたのち臨済宗の師家となった人物である。従来、揺るぎない校訂本とされて来た流布本における「自分の理解の範囲に合わせて相手を無理矢理適合させるという強引な遣り方」による「様々な荒唐無稽な解釈」を指摘し、その謬見を打破したものであった²⁶。さらには白隠禅師の「我田引水的強引さ」と思われるところも明らかにした画期的なものであった²⁷。かつて鈴木大拙は「槐安國語を読みて」という一文を草した。これは唯一といってもいい鈴木白隠論で、白隠の著語の典型を考証するものであるが、その中で、「『槐安國語』につきては研究など云ふものは何もない。臨済各派の叢林の奥の方でお師家さんが講座の上から提唱なるものをやるに過ぎないのである」²⁸と述べたことがあったが、道前によって初めて近代的メスが入ったのである。

2003年7月、花園大学国際禅学研究所HP上に「白隠学研究室」が開設され、いくつかの基本資料を公開するとともに、芳澤勝弘の「白隠学に向けて一回顧と展望」という提言がなされた。その一部分を再録する²⁹。

まもなく没後250年になるが、白隠ほどその本質的探求がなされぬままに放置され、しかも一方で崇めたたえられて来た宗教家も少ないであろう。

繰り返して言う。白隠の思い描いた「宗教革命」は、「上求菩提、下化衆生」という実践的テーマに集約される。それは永遠の未完成である。永遠に問い続けられるべき課題であり、その時代その時代において、常に新しい意義を見いださねばならぬ、そのような課題に他ならぬ。

文化・政治・経済あらゆる分野で矛盾が噴出している昨今である。白隠禪師が今の世におわしたならば、どのような一句を吐き、どのように対処されるであろうか。こうした現代的課題に対する答えは、他ならぬ禪師の著作の中にそのヒントがこめられている。新しい切り口によって、白隠禪師の著作をとらえなおさなければならない。

漢文語録・仮名法語・書簡・墨跡・禪画、これらの著作に内包される禪師の思想を汲み取るには、仏教学、禅学、禅宗史学の方法や観点からする解析のみでは不十分であるし、むしろ、広大な視野をもった白隠思想を矮小化してしまうことになる。国語国文学、民俗学、芸能史、美術史、政治史、地方史、思想史、心理学等々、あらゆる視点から、その特徴を解明することが必要である。

なぜならば、白隠その人こそが、社会のあらゆる部門にすこぶる旺盛な関心もち、日本文化のあらゆる要素を取り入れた著作や禪画によって法を説いた、希有な禅僧だからである。このような白隠思想の総合的解明を、私は「白隠学」と名づける。法財は、ほとんど手つかずのまま、そこにある。

以上は没後250年に向けて提唱をしたものであるが、白隠研究の向かうべき方向としては今も変わらぬものと信ずる。

さて、「白隠学」を提唱してからのちの、白隠研究の主だった成果を総覧しておく。

2009年、『白隠禪画墨蹟』〈全3冊〉が刊行された³⁰。2005年来、花園大学国際禅学研究所によって白隠墨蹟の全国調査が行われ、それによって収集された資料の中から1050点の墨蹟・禪画を収録したもので、詳細な解説が付されている。これまで白隠の墨蹟・禪画は主として美術的関心から取

り上げられて来たが、単なる美術ではなくそこには、絵と文字（画と賛）のコラボレーションによる白隠独特の思想が込められていることを明らかにした。

2015年、白隠没後250年を迎えて、二つ重要な白隠著作が記念出版された。その一つは『白隠和尚荆叢毒藥』訳注、乾・坤である³¹。これは白隠の漢文語録の初の完訳で、乾坤あわせて2300頁を超える大冊である。白隠自身はこの語録を刊行し、自らこれを提唱しており、その提唱での聞き書きを東嶺らが記録した「書き入れ本」が伝わっているが、本書ではその「書き入れ」を忠実に翻刻して注釈に入れている。本書の英訳も刊行されている³²。

そしてもう一つは、『新編・白隠禪師年譜』である³³。白隠年譜には草稿があり、その重要性は陸川が指摘したところである。一方で白隠はいくつかの仮名法語で自伝の記事を数多く記している。本書では草稿、刊本、さらに『東嶺和尚年譜』を対照して収載し、さらに仮名法語に見える自伝の記事を網羅して収め、それぞれの齟齬矛盾が一覧できるようにしている。さらに同時代の原宿等の記録も併載して、時代の中での白隠像を追求できる資料となっている。

最後に白隠著作の中で、比較的研究が及んでいないものをあげておく。

その第一は『寒山詩闡提記聞』である³⁴。延享3年、白隠61歳のときのもので、最も早い著作の一つである。その内容は『寒山詩』を講義提唱したもので、そこに示された典故や語釈は白隠会下の総力を結集して博搜したものが反映されている。白隠の提唱は、『寒山詩』を忠実に解説したのではなく、独自の見解によって禅的に解釈したものである。主題が『寒山詩』であることもあって、古来、幾人かの師家によって提唱されて来た。師家による提唱本があるために敬遠され研究対象とすることが憚られたのであろう。この『闡提記聞』は我が国における寒山詩解釈に大きな影響を与えて来た。そこに示される白隠の特異な寒山詩解釈を「深秘釈」として評価したのが西谷啓治である³⁵。しかし、文学として見た『寒山詩』の解

積は、白隠の理解と大いに異なるもので、四川大学の項楚は、中国古典と大藏経を博搜した詳細な語注を付け、白隠の解釈については是々非々の批評をしている³⁶。今後は、まずは文学としての『寒山詩』解釈をふまえ、その上で白隠独特の解釈がどのような意味を持つのか、さらに批判的に整理する必要があるだろう。こうした分野については、参禅の経験をもつ「宗門出身の研究者」の参加が望まれる。

その二。『布鼓』は、白隠は30歳から40歳ころに書いた因果物語集、つまり現代的に言えば小説である。国文学では仏教小説という研究分野があり、鈴木正三の『因果物語』はその研究対象となっているが、白隠のこれらの作品は国文学界からは閑却されたままである。井原西鶴と同じテーマのものもあり、その表現力は西鶴をはるかに上回るものもある³⁷。この分野については、国文学研究者の参入を期待したいところである。白隠研究の向かうべき方向については、先に「白隠学に向けて」で提唱したように、禅学、禅宗史学だけではなく国語国文学、民俗学、芸能史、美術史、政治史、地方史、思想史、心理学等々、あらゆる視点からの再検討であると信ずる。そのような観点からみて、近年、管見に入ったもののうち新鮮な論考をいくつか紹介しておきたい。

平尾真智子の「白隠禅師の仮名法語にみる「健康」の語の使用」は、白隠の仮名法語、語録に見える「健康」の語に注目し、現代では誰もが用いているこの言葉のもっとも早い使用例が白隠であることを考証するものである³⁸。柳幹康の「白隠慧鶴と『宗鏡録』」では、白隠思想の根幹である「悟後の修行」の概念が、白隠は認識していなかったものの、『宗鏡録』に見えることを論じている³⁹。原田香織の「白隠禅師と能楽」は、白隠が創始した「隻手の音声」の発想の根源が謡曲「山姥」にあるところに注目し、能の幽玄世界と禅との関連を論じている⁴⁰。

ごく最近では馬淵美帆「白隠慧鶴による英一蝶作品の受容」という論考がある。白隠が一蝶作品の影響を受けた背景に、江戸を中心として全国に広がる俳人のネットワークがあることを明かしたのは画期的であった⁴¹。

【注】

- 1 禅学編集局（1898）『年譜』のほか12篇の仮名法語を収録。
- 2 大橋俊崖・上村義秀（1902）『年譜』『荆叢毒藥』『槐安國語』『息耕録開筵普説』ほか19篇の仮名法語を収録。
- 3 禅道会本部（1918）花園大学国際禅学研究所HP「白隠研究室」に収載する。
http://iriz.hanazono.ac.jp/k_room/k_room01f.html
- 4 曹洞宗師家新井石禅「祖席の英雄」、前曹洞宗大学教頭山田孝道「高節と至孝」、曹洞宗大学教授原田祖岳「嗚呼我正伝の仏法」、曹洞宗第一中学教頭孤峰烏石「白隠禅師以後の臨濟禅について」、曹洞宗大学教頭横尾賢宗「白隠の初中後」、若生國榮「応物現形の化風」、青龍一秋「白隠禅師の五位観」。
- 5 陸川堆雲。長野県下諏訪町在住の企業家で、早くから熱心な鎌倉禅の居士であった。その著作に陸川（1949）、同（1959）、同（1962）、同（1963）などがある。
- 6 飯田欒隠。医師を職としつつ居士として参禅。のち大阪府に少林窟道場を開いて師家となった。著書に飯田（1954）がある。
- 7 陸川（1963）p.48
- 8 白隠和尚全集編纂会（1934～1935）
- 9 1969年より筑摩書房から『禅の語録』全20巻シリーズが刊行開始された。柳田聖山、入矢義高を中心とした執筆陣で、禅語録の新たな読解を試みた。
- 10 桐田（2003）
- 11 柳田聖山先生追悼文集刊行会（2008）所収の「著作目録」。
- 12 陸川（1963）pp.55～56
- 13 陸川同上書p.128
- 14 ブラッシュ（1962）
- 15 竹内（1964）
- 16 古田・入矢編（1977～1978）。当時の仏教書ブームに乗じて大出版社が主導した企画であり、それぞれ個別分野の研究蓄積が十分にある上で練られた、時節因縁が熟したものとは思われず、日本禅宗研究の総力量を超えた計画だったと思う。ことに現代語訳にしたのは英断のように見えるが、かえって禍根を残した面もある。臨濟禅の担当は、「榮西」古田紹欽、「大応」荒木見悟、「大燈」平野宗浄、「抜隊」古田紹欽、「夢窓」柳田聖山、「寂室」入矢義高、「一休」柳田聖山、加藤周一、「沢庵」市川白弦、「盤珪」玉城康四郎、「無難・正受」市原豊太、「白隠」鎌田茂雄。フランス文学者の市原

- 豊太は「あとがき」で「どういふ廻り合せか、畑違ひの男が」といつている。
- 17 鎌田（1977）。これには『夜船閑話』『遠羅天釜』『藪柑子』の仮名法語と、ほんの一部とはいえ漢文語録『荊叢毒藥』の現代語訳が掲載された。ともあれ、白隠の著作が現代語訳され、大手出版社から刊行されたのは初めてのことであった。
 - 18 鎌田同上書p.3
 - 19 鎌田同上書p.34～35
 - 20 鎌田同上書p.31
 - 21 船岡（1997） p.437
 - 22 白隠著・芳澤訳注（1999～2003）
 - 23 松浦（1980） p.150
 - 24 芳澤（2005）のち、角川ソフィア文庫に収載（2016年3月）。
 - 25 英訳にYoshizawa(2009)、中国語訳に芳澤（2015b）。
 - 26 道前（2016）「序」 p.ii
 - 27 道前同上書「後書き」 p.970
 - 28 鈴木（1968） p.42
 - 29 <http://iriz.hanazono.ac.jp/newhomepage/newhakuin/index.html>
 - 30 花園大学国際禅学研究所編・芳澤監修解説（2009）
 - 31 白隠著・芳澤訳注（2015）
 - 32 Hakuin(2017)
 - 33 芳澤(2015a)
 - 34 『寒山詩闡提記聞』延享3年の刊。禅文化研究所に詳細な書き入れ本がある。
 - 35 西谷（1986）
 - 36 項楚（2000）
 - 37 芳澤（2001） p.437（「解説」）
 - 38 平尾（2018）
 - 39 柳（2018）
 - 40 原田（2019）
 - 41 馬淵（2020）

【参考文献】

- 飯田樵隠（1954）『槐安国語提唱録』書林其中堂。
大橋俊崖・上村義秀共編（1902）『白隠広録』二巻，天眼寺ほか。

- 鎌田茂雄 (1977) 『白隠 日本の禪語録19』 講談社.
- 桐田清秀編 (2003) 「著作年表」 鈴木大拙著・久松真一ほか編 『鈴木大拙全集』 第40巻, 岩波書店.
- 項楚 (2000) 『寒山詩注』 中華書局.
- 鈴木大拙 (1968) 「槐安國語を讀みて」 『鈴木大拙全集』 第4巻, 岩波書店.
- 禪學編集局編 (1898) 『白隠和尚全集』 一卷, 光融館.
- 禪道会本部編 (1918) 『禪道百号紀念「白隠研究」』 禪道会.
- 竹内尚次 (1964) 『図録白隠』 筑摩書房.
- 西谷啓治 (1986) 『寒山詩』 筑摩書房.
- 白隠慧鶴原著・芳澤勝弘訳注 (1999~2003) 『白隠禪師法語全集』 全13冊・別冊『総合索引』 禪文化研究所.
- (2015) 『白隠和尚荊叢毒藥 乾・坤』 (白隠禪師250年遠忌記念刊行) 禪文化研究所.
- 白隠和尚全集編纂会編 (1934~1935) 『白隠和尚全集』 八巻, 龍吟社.
- 花園大学国際禪学研究所編・芳澤勝弘 監修・解説 (2009) 『白隠禪画墨蹟』 〈全3冊〉 二玄社.
- 原田香織 (2019) 「白隠禪師と能楽」 『国際禪研究』 3, pp.95-115.
- 平尾真智子 (2018) 「白隠禪師の仮名法語にみる「健康」の語の使用 — 『於仁安佐美』 (1751) から 『さし藻草』 (1760) まで』 『日本医学史雑誌』 第64巻第3号, pp.241-256.
- 船岡誠 (1997) 「白隠禪の思想史的意義」 末木文美士編 『叢書・禪と日本文化』 第8巻 禪と思想』 ぺりかん社 (圭室文雄・大桑斉編 (1979) 『近世仏教の諸問題』 雄山閣からの再録)
- 古田紹欽・入矢義高監修 (1977~1978) 『日本の禪語録』 全20巻, 講談社.
- ブラッシュ, クルト (1962) 『禪画』 二玄社.
- 松浦静山 (1980) 『甲子夜話続編』 卷三十六 (東洋文庫369) 平凡社.
- 馬淵美帆 (2020) 「白隠慧鶴による英一蝶作品の受容」 板倉聖哲・高岸輝編 『日本美術のつくり方—佐藤康宏先生の退職によせて』 羽鳥書店.
- 道前慈明 (2016) 『訓注槐安國語』 禪文化研究所 (同 (2003) 『訓注槐安國語』 禪文化研究所の復刊版)
- 柳幹康 (2018) 「白隠慧鶴と『宗鏡録』」 『印度学仏教学研究』 67-1, pp. 292-286.
- 柳田聖山ほか (1969~2016) 『禪の語録』 全20巻, 筑摩書房.
- 柳田聖山先生追悼文集刊行会編 (2008) 『柳田聖山先生追悼文集』 同刊行会.

- 芳澤勝弘 (2001) 「解説」白隠慧鶴原著・芳澤勝弘編註『仮名因縁法語・布鼓』(『白隠禪師法語全集』第11冊) 禪文化研究所.
- 芳澤勝弘 (2005) 『白隠—禪画の世界』(中公新書) 中央公論新社。のち、角川ソフィア文庫に収載 (芳澤勝弘 (2016) 『白隠—禪画の世界』KADOKAWA/角川学芸出版)
- (2015a) 『新編・白隠禪師年譜』 禪文化研究所
- (2015b) 『白隠 禪画の世界』 河北教育出版社 (楊晶・李建華訳)。
- 陸川堆雲 (1949) 『臨濟及臨濟録の研究』 喜久屋書店.
- (1959) 『臨濟録詳解—臨濟録鶯湖鈔』 真禪研究会.
- (1962) 『夜船閑話—評釈』 山喜房仏書林.
- (1963) 『考証白隠禪師詳伝』 山喜房仏書林.
- Hakuin zenji (2017) *Complete Poison Blossoms from a Thicket of Thorn: The Zen Records of Hakuin Ekaku*, Counterpoint (translated by N. Waddell).
- Yoshizawa K. (2009) *The Religious Art of Zen Master Hakuin*, Counterpoint (translated by N.Waddell)